

I 研究主題及び副題

確かな学びを生かし、将来の郷土えびのを担う人財の育成
～児童・生徒の汎用する力を高める授業づくりを通して～

II 主題設定の理由

平成 29 年度に新たに改訂された学習指導要領が公示された。この改訂は、2030 年頃の社会を見据え、さらにその先の豊かな社会を築くために活躍する子ども達の姿を見通した「教育の役割」とは何かという視点から議論が進められた。情報の進化が、経済や文化などのグローバル化を加速させる中で、ひとつの出来事が広範囲で複雑化し、先を見通すことが困難となっている。予測が困難な時代において、解き方が決まった問題を効率的に解いたり、決められた手続きを効率的にこなしたりするだけではなく、主体的に感性を働かせて、他者と協働しながらより豊かなものを創り上げていくことが期待されている。学校教育を通じて、主体的に学びに向かい、人生を切り拓くことや様々な人々と協働していくこと、新たな価値の創造や問題の発見・解決をしていく児童・生徒を育成していくことが望まれる。

本市においては、平成 28 年度から、研究主題を「確かな学びを生かし、将来の郷土「えびの」を担う人財の育成」とし、研究を進めてきた。具体的には、えびの市内の教職員の指導上の課題や全国学力学習状況調査における児童・生徒の課題をもとに「確かな学びが身に付く指導の在り方」と「確かな学びを生かす活用の在り方」について実践研究を進めた。その中では、「分かる」板書や発問の視点を明確にし、活用する力を高める場面を意図的に設定した。それによって、教師は一単位時間の授業を見通し、児童・生徒の課題やつまづきを意識した教材分析を行い、構造的な板書や意図的な発問を行うことができた。また、発問の視点を明確にしたことにより、児童・生徒は理由や根拠を明確にしながらかし合い、問題を解決することができた。教師の授業づくりに関する研究を行ってきたが、依然として児童・生徒の活用に関する力の高まりは十分とは言えない状況である。

そこで、今年度は、副題を「児童・生徒の汎用する力を高める授業を通して」とし、児童・生徒の活用する力の向上を目指し、様々な教科での授業づくりを進め、主体的な学びや対話的な学びにつながる研究・実践を行うことにした。これまでの具体的な「発問や板書」「話し合い活動」などの実践を踏まえ、児童・生徒が自ら問いをもったり、解決方法を選択したりしながら学習していく授業を目指す。また、児童・生徒同士や教師と話し合ったり、資料等を通して調べたり、情報を加工してまとめたりする活動を設定することで思考力・判断力・表現力を高めていく。それらの学習を通して児童・生徒が、十分に理解を深めたり、納得したりすることのできる「深い学び」につながるような授業を構想し展開していく。その意義や効果的な方法を、えびの市内各校の教職員へ示すことで、各教師の授業づくりに活かせるようにし、児童・生徒の学力向上につながるようにしたいと考えた。そして、本市の児童・生徒の課題である活用する力の改善及び向上を目指したい。

このような研究を進めることは、児童・生徒が、自ら問題意識をもち、学び続ける姿勢を身に付けることができ、本市が目指す「徹底した学力の向上」「地域に貢献する人材の育成」につ

ながるものであり、教師が授業改善を図ったり、児童・生徒が主体的に学力を身に付けたりする上で非常に意義深いものであると考える。

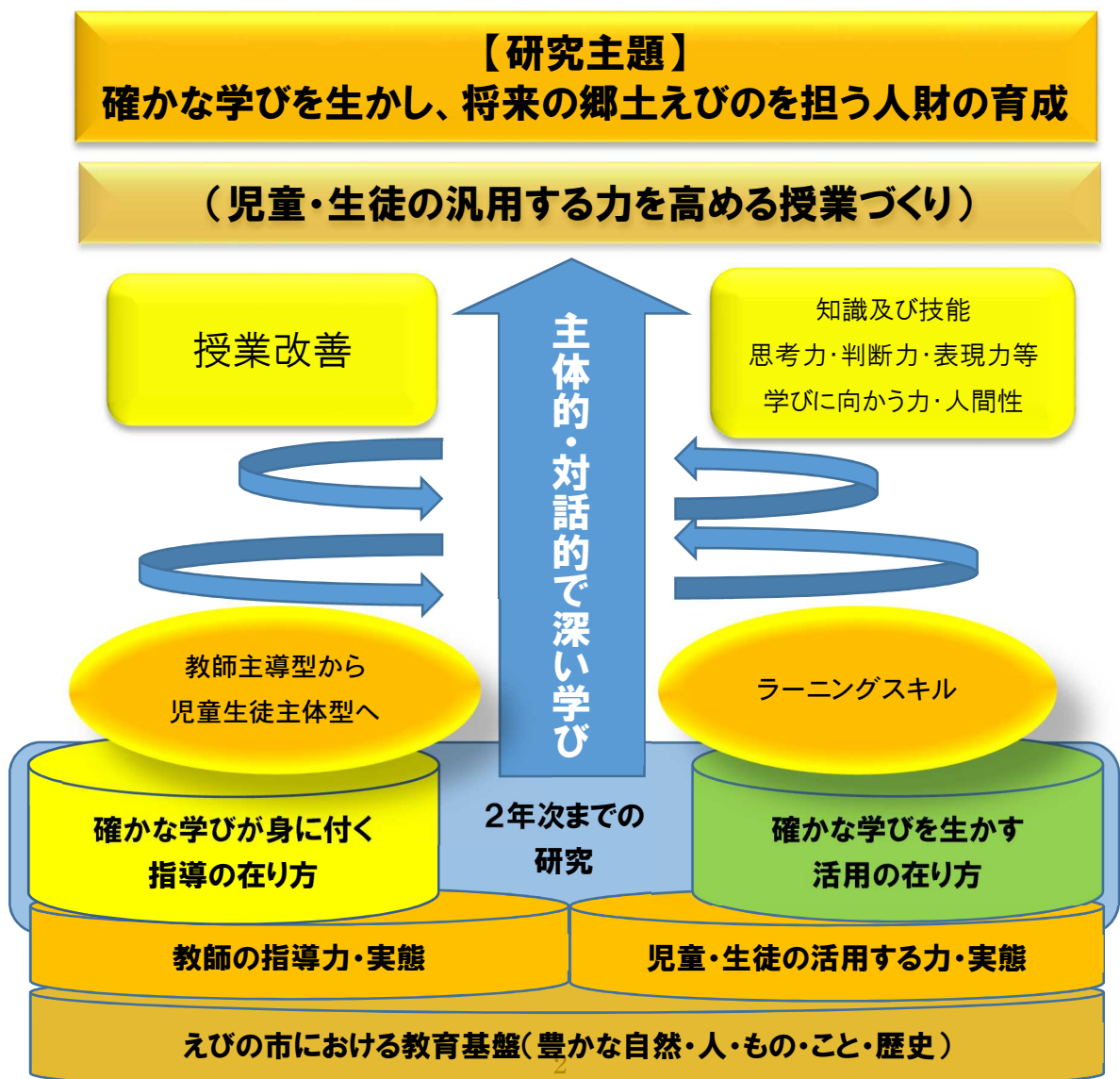
III 研究の目標

主体的・対話的で深い学びを実現するための方法を理論的・具体的に示すことで、えびの市内の教師が授業実践に活かすとともに、児童・生徒の活用する力の向上につなげることができるようにする。

IV 研究の仮説

児童・生徒の主体的な学びや対話的な学びを具現化する方法を究明し、それらを通して深い学びを実感できる授業づくりをすることで、児童・生徒は自ら学ぶ姿勢を身に付け、思考・判断・表現し、活用する力を高めることができるであろう。

V 研究の構想



VI 研究の実際

1 研究の方向性

(1) 主題に関係すること

主題に迫るための研究内容や方向性について確認し、授業づくりに取り組みながら、学習指導要領で示された新たな課題に対応できる児童・生徒の育成につなげることとした。

【確かな学びを生かす】

当該学年で身に付けておかなければならない知識・技能を用いながら、学習や実生活での課題解決において、自らの力を進んで発揮している姿

【将来の郷土「えびの」を担う人財】

児童・生徒が生まれ育ったえびの市の今後について、考えたり貢献したりする人材を指す。特に「人財」としているのは、将来のえびの市において、地域を活性化させたり、貢献したりできる貴重な「財(たから)」であることを強調している。また、第二次県教育振興基本計画の理念をえびの市においても具現化する姿勢を示している。

(2) 副題に関係すること

副題においては、主題に迫るための授業の在り方について示すこととする。小学校学習指導要領解説「総則」の総説においては、改訂の基本方針の中で次のように授業改善の視点を示している。

【改訂の基本方針】③「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

イ 授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、児童生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で、授業改善を進めるものであること。

ウ 各教科において通常行われている学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決学習など）の質を向上させることを主眼とするものであること。

総則の第3節「教育課程の実施と学習評価」においては、次のように授業改善に関する内容が示されている。

【主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善】

一部省略～ 単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。

特に、各教科において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を発揮させたりして、学習の対象となる物事を捉える視点や考え方が鍛えられていくことに留意し、児童が各教科等の特質に応じた見方・考

え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。

これらのことを受けて、本センターにおける授業改善の視点として、児童・生徒が自ら問題意識をもったり、既習事項や生活経験を自ら引き出したりしながら問題解決をしていく姿を設定した。主体的に学習を進めるためには、さらなる授業改善と児童・生徒に必要なスキルを身に付けさせるための手立てについて研究する必要がある。

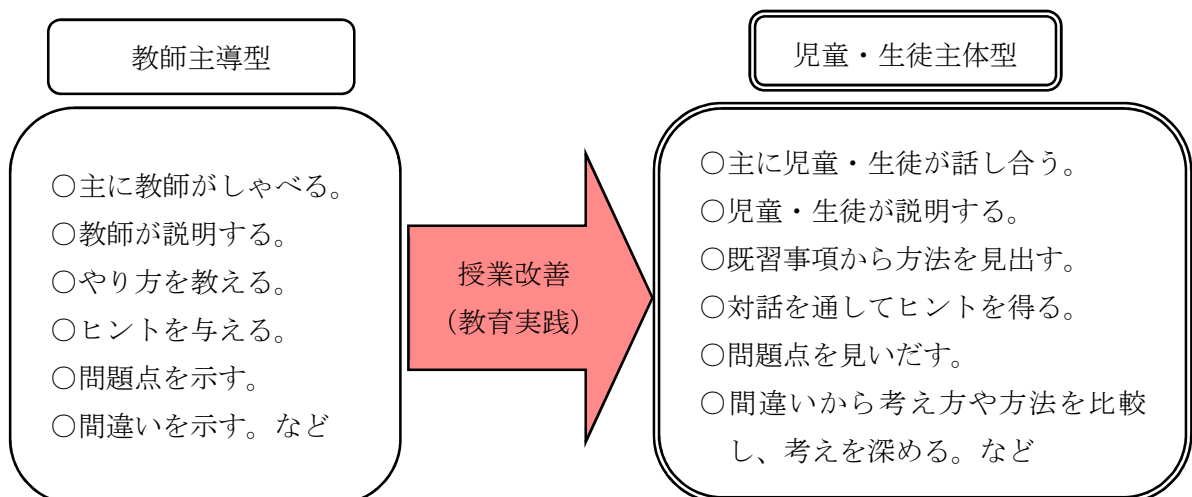
2 授業改善への取組

昨年度までの研究内容である「発問」は、児童・生徒に「問いのモデル」を示しておくことで、児童・生徒の疑問が「問い」として出てくることが実践の中から見えてきた。この研究結果から、これまで教師が児童・生徒に与えていた「教師主導型」の授業から、児童・生徒が自ら思考し作り出す「児童・生徒主体型」の授業を展開することで、主体的に学習に取り組むことができると考えた。

これまでも行われてきている児童・生徒主体の学習をより進めるためには、授業の各場面での児童・生徒主体の活動が重要であり、学習過程のそれぞれの段階における授業改善を進め、児童・生徒が自ら思考し主体的に学習する力の育成を図る必要がある。

そこで、一単位時間の学習過程における「教師主導型」から「児童・生徒主体型」への転換のポイントを整理し、実践を進めた。

【図1 授業改善のイメージ】



【表1 一単位時間における授業改善の視点】

過程	学習活動	活動のポイント
導入	1 題意を把握する。(①) (②) 2 めあてを設定する。 3 学習の流れを確認する。	○ 問題点や前時との違いを見出す。 ○ 学習計画表をもとに、学習の見通しをもつ。 ○ 既習事項から方法を見出す。
展開	4 個人で考える。 (③、④) 5 グループで考える。 (④、⑤) 6 全体で考える。 (⑤) 7 類似問題に取り組む。	○ 既習事項から解決方法を見出す。 ○ 主に児童・生徒が話し合う。 ○ 児童・生徒が説明する。 ○ 対話を通してヒントを得る。 ○ 間違いから考え方や方法を比較し、考えを深める。
終末	8 本時内容をまとめる。 9 振り返る。	○ 学習の前後の考え方や方法を比較し、考えを深める。

(1) 「問いのモデル」を用いて、問題点を見出す。

児童・生徒が自ら、問いをもち、それを表現したり自覚したりすることで、学習に取り組むことができるように、「問いのモデル」を用いることとした。



【写真1 問いのモデル】

「何」「だれ」「いつ」「なぜ」「どちら」「どのように」という5W1Hの疑問詞を用いて、児童の問いを言葉で表現できるようにした。また、問いを一つずつ付箋紙に書くことで、疑問を整理したり、分類したりことができ、問題意識の向上の一助となった。

(2) 学習リーダーが進行する。

児童・生徒が授業の進行をすることで、児童・生徒が主体的に授業に参加できるようにした。

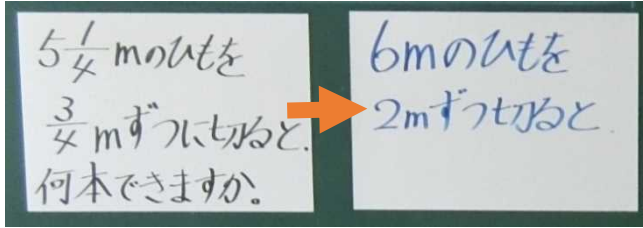


学習リーダーが、教科書を使って、前時の内容をクイズ形式で読み、既習事項を確認した。また、本時の学習につながる内容についても教科書を使って復習した。

【写真2 児童が進行する授業の様子】

(3) 問題文の数を簡単な整数に直したものを示す。

問題解決に必要な考え方を、既習事項や児童・生徒による気づきから展開していくことで、児童・生徒の主体的な課題解決を促すようにした。



「問題の意味は分かるが立式ができない」という児童の発言を受けて、「整数だったら・・・」と別の児童が発言した。

【写真3 解決方法の手立て】

(4) 思考ツールを用いて、考えを出し合ったり整理したりする。

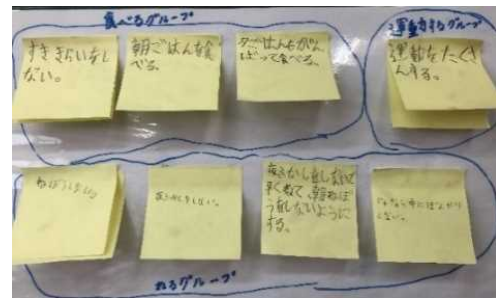
児童・生徒の考えを、KJ法などの思考ツールを使って分類したりまとめたりすることで、個人の考えを出しやすくしたり、視点に基づいてまとめたりすることができるようにした。



【写真4 カードを使ったKJ法】

6学年社会科では、条約改正にいたった要因を整理する授業を行った。児童から出ると予想される言葉をセンテンスカードにしておき、児童の思考時間を十分に確保できるようにした。

「元気がないたくみさんの1日」を見て、だめだと思う部分やどういう生活をすれば元気になれるのか付箋に書き、グループで話し合いながら仲間分けすることができた。



【写真5 付箋紙を使ったKJ法】

(5) 話し合いの活性化を促し、考えを深める。

発言の仕方や教具を工夫することで、分からない児童と分かる児童が双方向に意見を言え

分からない児童に分かっているところまで発言させたことで、他の児童の発言を促し、意見を出し合って解決できるようにした。



【写真6 分かるところまで話す児童】



【写真7 思考の可視化】

教具の工夫により、思考を可視化することで、生徒自身が考察できるようにした。班で意見を出し合い、考えを深め、発表することができた。

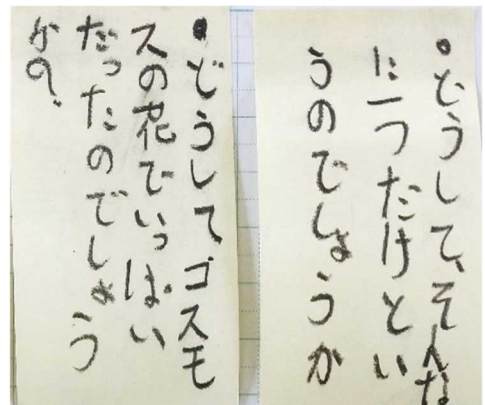
3 ラーニングスキルを用いた児童・生徒の育成

児童・生徒が主体的に学習するためには、教師が児童・生徒に必要な態度や技能を身に付けさせておかななくてはならない。その力を身に付けさせるために、ラーニングスキル(自主的学習能力)を「問題把握の段階」、「個人思考の段階」、「集団思考・解決の段階」、「まとめ・ふりかえりの段階」に分けて考え、実践を通してその効果を検証した。

(1) 問題把握の段階

児童・生徒が学習課題に対してどのような問題意識をもつかが、極めて重要である。教師から毎回同じような指示を受けなくても、学習に取り組むことができるようにした。

- ① 授業を円滑に進めるための筆写の速さ
 - ・ 学習問題、めあてをノートに書く。
 - ・ 疑問や問題をノートに書く。
- ② 学習に適した声、文章を読む速さ
 - ・ 声のものさし「3」の大きさを音読をする。
 - ・ 2分間で音読する。
- ③ 問題を捉える力
 - ・ 生活経験や既習事項をもとにして疑問をもつ。
 - ・ 問いのモデルを用いて、自分の疑問を書く。
 - ・ 疑問を整理する。



【写真8 児童の問い】

【考察】

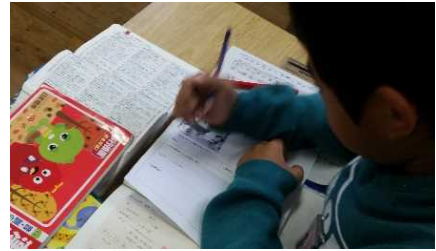
- 学習課題や問題を教師ではなく児童・生徒に読ませることで、自分自身で題意や問われていることを考える姿勢を身に付けさせることができる。
- ブレーンストーミングを行うことにより、児童・生徒から出された言葉をもとにしためあての設定を行うことができる。
- 児童・生徒の生活経験と関連させた資料を提示することで、児童・生徒に疑問をもたせることができる。
- 児童・生徒の生活経験と結びづけたり資料等を用いて想像させたりすることが難しい場合に、どのような「問い」をもたせるかが課題である。

(2) 個人思考の段階

個人思考の際には、既習事項を活かしながら、自分の力で考える必要がある。集団解決の段階での話し合いにおいて自分の考えを伝えるということを意識して取り組むことが重要である。そのためには、一人で調べる方法や分からないことを見つけられる力が必要となる。

- ① 学習問題、めあてに沿って個人で調べること
 - ・ 分からない言葉を辞書で調べる。
 - ・ 既習事項を使って自分で考える。

- ・ 教科書やノートを振り返りながら、調べる。
 - ・ 解決方法を選択する。(絵、図、表、グラフ等)
 - ・ 情報を取捨選択する。(書き込む、矢印をかく等)
- ② 自分の考えをまとめること
- ・ 考えたことを文章に書いて表す。
 - ・ 考えたことを図や表などを使って表す。



【写真9 辞書で調べる児童】

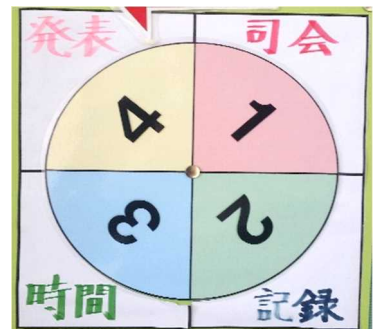
【考察】

- 調べる方法について、具体的に指導していくことで、主体的に取り組もうとする姿勢が多く見られるようになる。
- ワークシートを工夫したり付箋紙を使用させたりすることは、児童・生徒が自分の意見をまとめる際に、効果的である。
- 活動の進まない児童・生徒への支援の方法を工夫していく必要がある。
- 個人思考を深めるためには、思考を深めるための手段を児童・生徒自身が多く知っている必要がある。
- 児童・生徒が思考を深める方法を取捨選択できるように、学年や内容に応じた段階的な指導が必要であり、見通しをもった指導を行う必要がある。

(3) 集団思考・解決の段階

集団思考の際には、グループ全員が話し合い活動に参加すること、視点に沿うことなどが重要である。また、主体的に関わるために司会力を高めることも必要がある。

- ① 集団で協働的に解決すること
- ・ 役割分担をして話し合う。
 - ・ 進行を中心に、自分たちで解決していこうとする。
 - ・ 同じ考えであっても、自分の言葉で表現する。
- ② 視点をもって話し合うこと
- ・ 自分と他者の考えを比べながら聞き、自分で発言する。
 - ・ 理解できないことや疑問に思うことを発言する。
 - ・ 自分の考えの理由や根拠を明確にしなが話し合う。



【写真10 役割分担表】

【考察】

- 個人思考のあとに話し合い活動を行う授業の流れを基本とすることで、児童・生徒が円滑に話し合い活動に入れる。
- 工夫されたワークシートやホワイトボード等の道具を活用することで、話し合い活動を深めることができる。
- 児童・生徒が話し合って解決していく流れはできつつあるが、話し合いを深めるためには、話し合いに必要な語彙を増やしていく必要がある。
- 話し合いのマニュアル等を準備した指導にとどまることなく、さらに継続して話し合いのス

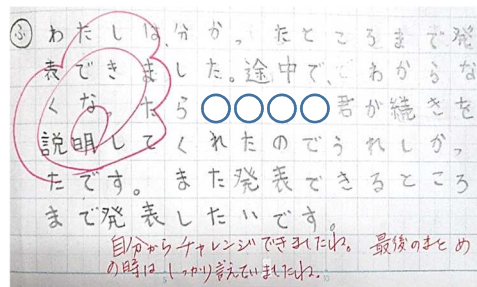
キルを身に付けさせておく必要がある。

- 話合いの深まりがない見られない場合の教師の関わり方について検討が必要である。

(4) まとめ・ふり返りの段階

学習内容をふり返し、分かったことをまとめることで、学習に対する自覚をさらに高めることができる。学習内容に対するまとめや学習方法をふり返ることは、学びを実感し、学びを継続させる力につながっていく。

- ① 学習内容をふり返ること
 - ・ 児童・生徒の考えをもとに、まとめを書く。
 - ・ 学習を振り返り、分かったことを文章に書く。
- ② 学習方法をふり返ること
 - ・ 協働的に学んだことの成果や課題を書く。
 - ・ 話合いの方法で学んだことの成果や課題を書く。



【考察】

【写真 11 学習方法へのふり返し】

- 学習課題を工夫したことで、まとめの活動にスムーズに入ることができる。
- 児童・生徒の言葉でまとめさせることで、学びを自覚し学習を振り返ることができる。
- 教師は、児童・生徒の書いたまとめを分析することで、授業改善に活かすことができる。
- まとめさせる際のモデルを段階的に指導していく必要がある。

VII 成果と課題

1 成果

- 発問の視点等、これまでの研究内容をふまえた取組を行い、児童・生徒を主体とした授業づくりにつなげることができた。
- 授業改善の視点に沿って、実践を行ったことで「主体的な学び」についてのゴールイメージを教師がもつことができた。
- ラーニングスキルを設定したことにより、児童・生徒の学習訓練に関する内容を整理することができた。
- ラーニングスキルを身に付けた児童・生徒が、主体的な学習を促したり、教師が不在の場合にも、自分たちで学習を進めたりする姿が見られた。

2 課題

- 考えを整理したり、広げたりするために必要な思考ツールを整理し、深く考える力について継続して指導することで、汎用的な力を小中9年間で高めていけるようにする。
- 広報誌や授業公開を通して、えびの市で目指す授業づくりについて、市内の教職員に啓発を行い、研究内容についてさらに共有できるようにする。

○参考文献・引用文献

- ・小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 文部科学省 東洋館出版
- ・中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 文部科学省 東洋館出版
- ・自学力育成プログラム 井上一郎・永池啓子 編著 明治図書
- ・思考スキルに焦点化した授業設計のためのパンフレット

研究代表者 泰山裕 財団法人パナソニック教育財団

○研究同人

役 職	氏名（所属）	役 職	氏名（所属）
所 長	萩原 和範（えびの市教育委員会教育長）	研究員	川嶋 千穂子（えびの市立加久藤小学校教諭）
主 幹	平川 滋也（えびの市教育委員会主幹）	研究員	山之口 忍（えびの市立真幸小学校教諭）
指導主事	大峯 隆史（えびの市教育委員会指導主事）	研究員	西岡 有紀（えびの市立飯野中学校教諭）
座 長	渡邊 政彦（えびの市立岡元小学校教頭）	研究員	伊藤 真純（えびの市立上江小中学校中学部教諭）
研究員	高須 翔太（えびの市立飯野小学校教諭）	研究員	門田 直樹（えびの市立加久藤中学校教諭）
研究員	甲斐 寿美（えびの市立上江小中学校小学部教諭）	研究員	新田 聖一（えびの市立真幸中学校教諭）